

松村先生にまつわる話

阿知波 吏恵

私は、松村先生の弟子と呼ばれるには及ばない存在で、芸大でも松村クラスではなく、曲が書き上がったら見ていただく、という程度のものでした。なので、レッスンとしては数えるほどの回数しか受けていないのですが、しかし、その1つ1つが鮮明に記憶に残っていて、私の音楽の糧となっています。

今日は、その中からいくつかをご紹介しますと思います。

私がはじめて松村先生にお会いしたのは、高校3年生の秋のことでした。当時師事していた國越健司先生のご紹介で成城のお宅にお伺いしました。

その時の第一印象はレッスン等の内容ではなく、先生のお宅に犬と猫がいて、猫ちゃんの名前が“ドルチェ”という名前だったことです。さすが、芸術家の先生は猫につける名前も違うなあ、と思っていたところへ、優しい面立ちの松村先生がリビングに入ってらして、初めて先生にお会いしました。その後、その“ドルチェ”が部屋を行き交う中、先生に和声などをお見せしたのですが、先生は楽譜を見るなり、厳しい表情になられたことも大変印象強く記憶しています。それから、今後のことなどを話し合っ、まあ、頑張りなさい、という感じで終わり、先生との初対面はレッスンというものではありませんでした。

話は少しそれますが、その後、松村先生のご紹介で池内先生のところへ行くことになったのですが、池内先生のところで、いきなり先生に“猫いらんか〜”と言われたことは、“ドルチェ”をはるかに上回る強烈さでした。師は師に似る、ということなんでしょうか、私は犬派ですが。

“曲が書けたらいつでも見せに来なさい”と先生にいつも言われていたのですが、なかなか曲が書けず、手ぶらで先生の顔だけ見に行くことが多かった私。ある時、“何かないの?!”と先生に言われて、“書きかけのものならあります…、でもとても汚いので…”と言うと、“いいから見せなさい!!”と怖い顔で言われたので、しぶしぶ鞆から出してお見せしたのでした。

私が鞆から楽譜を出すなり、先生の表情がさらに厳しくなりました。しばらく

く無言でその楽譜をご覧になると、厳粛な雰囲気でごうおっしゃられました。

“君のこの曲に対する愛情はこんなものかね”

“はい?”

“作曲家が自分の作品にどれだけの愛情をもっているかは、楽譜を見ればすぐにわかる。君のこの楽譜は何だっ!、いくら書きかけの下書きかもしらんが、自分の曲をこんなぐちゃぐちゃな状態にしておくとは、君の作曲態度はそんな程度のものなのかつ!、そんな作曲はしなくてもよろしいっ!!”
“...”

言葉が出ませんでした。私の作曲態度を改められた瞬間でした。その後、その曲は一から書き直し、完成した作品をお見せした時は、“うん”の一言だけをいただいた記憶がかすかに残っています。

それ以来、私は“製本”が得意になりました! 今では“どんなに小さな本番でも、必ず楽譜をきちんとする”ことをモットーとし、自分の生徒たちにもそれを言い聞かせています。

私の代表作品“雲”シリーズの1作目を先生にお見せした時のことです。テーマは“うろこ雲”で、多数の小さなうろこ雲を表現するために、同じ音形のモチーフをたくさん使ったのですが、先生は、それが単純で面白くない、とおっしゃるのです。いつものように、先生の顔つきが厳しくなり、次に何を言われるのだろうとビクビクしていたら、先生は1冊の大きな楽譜を取り出され、“これを弾いてみなさい”とおっしゃられました。

それは、ベートーヴェンのワルトシュタインの第3楽章でした。ピアノ科上りの私は、その曲は幸運にも高校の学内試験で弾いたことがあり、久しぶりだったとはいえ、最後まで私なりに結構完璧に弾けたのでした。弾き終わったあとの先生のコメントは何もありませんでした。先生のお顔はとても穏やかな表情でした。“あとは自分で考えろ”ということなんだと私は解釈しました。

今から思うと、先生に私のピアノを聴いていただいたのはその時が最初で最後でした。と同時に、これからは作曲とピアノと両方を頑張ろうと思った瞬間でもありました。

2014年8月 アプサラスによせて